

最終講義抄録



信州大学整形外科16年を振り返って

加藤博之

信州大学医学部運動機能学（整形外科学）教室

## 加藤博之 教授 略歴

### [学歴および職歴]

- 1979年3月 北海道大学医学部医学科卒
- 1979年6月 北海道大学医学部附属病院整形外科研修医
- 1980年4月 釧路労災病院整形外科医師
- 1981年4月 北海道大学医学部附属病院整形外科研修医
- 1982年4月 美唄労災病院整形外科医師
- 1983年4月 北海道大学医学部附属病院整形外科研修医
- 1985年4月 名寄市立病院整形外科医長
- 1986年4月 北海道大学医学部附属病院整形外科研修医
- 1987年4月 北海道大学整形外科助手
- 1990年5月 米国 Texas Tech University 留学 Research Fellow
- 1991年7月 釧路労災病院整形外科部長
- 1995年3月 北海道大学整形外科助手
- 1998年4月 国立療養所西札幌病院整形外科医長
- 2000年10月 北海道大学大学院整形外科講師
- 2001年4月 北海道大学大学院整形外科助教授
- 2003年4月 信州大学医学部運動機能学（整形外科）教室教授

### [学会役員等]

- 日本整形外科学会理事（平成29年～）
- 中部日本整形災害外科学会理事（平成28年～）
- 日本手外科学会理事（平成20～23年），理事長（平成30年～）
- 日本肘関節外科学会理事（平成20～24年），理事長（平成28年～）
- 日本末梢神経学会理事（平成18年～）
- 日本小児整形外科学会評議員（平成12年～）
- 日本骨折治療学会評議員（平成29年～）
- リウマチの手の外科研究会世話人（平成14年～）
- American Society for Surgery of the Hand: International member（2014～）
- 中部日本手外科研究会幹事（平成16年～）

# 信州大学整形外科16年を振り返って

加藤 博之

信州大学医学部運動機能学（整形外科）教室

今日までご指導とご支援を頂いた信州大学医学部および関連病院の先生、医療関係者の皆様に心より感謝申し上げます。また、合同退職記念会を開催していただき、ご出席、ご準備いただいた方に、お礼申し上げます。信州大整形外科赴任前、在任16年間の4年毎を振り返り、退任後の展望について述べさせていただきます。

2000年、北大整形外科教室に新任教授が誕生し、私は市中病院から戻り新教授と新しい教室の立ち上げに尽力する機会に恵まれた。1、2年経過し、新教授と診療分野が同じで年齢差が7歳ということもあり、母校の教室を出て新しい環境に身を置きたいと思うようになった。丁度その頃、信州大整形外科教授の募集があった。信州は、医学生時代の東医体スキーで訪れており、身近な県の一つであった。応募時の大学教員キャリアは2年あまりで、採用の可能性は少ないと思ったが、結果に拘わらず母校を去るつもりで応募した。採用決定の通知を頂いてから赴任までの2カ月間、いくつか送別会を催していただいたが、たいていの宴席名は、“加藤先生を励ます会”と銘打たれていた。送り手の方々も“加藤先生、縁もゆかりも無い、信州に1人で行って大丈夫かいな？”という心配、気遣いがあったからであろう。

2003年～2006年赴任最初の4年間は、私の専門領域である手肘の外科は、私以外は専門家が学内におらず、骨折から指再接着まであらゆる分野を思いどおりに手術させて頂き、楽しい時期であった。教室の手術件数は約600件/年であった。基礎研究は高岡邦夫前教授の研究を継続し、臨床研究を発展させる事を目指した。この期間の教室の英語論文数は約20編/年であった。私は、教育分野は全くの素人であり、信州大学医学部での各種FD、泊まり込みの学生指導など、目から鱗の勉強をさせていただいた。赴任直後より医学部スキー部顧問に、2005年には整形外科関係の怪我人が多い理由でラグビー部の顧問も兼任させていただいた。合宿や東医体を通じて純真な医学生との交流は、損得抜きの宝物であった。2004年に初期研修制度が始まり、この4年間の新人は13人と少なく、関連病院を数か所

引き上げざるを得なかった。各病院を車でまわり、病院長や整形外科部長にその旨を直接にお知らせに回ったが、在任中で最もつらい事の一つであった。2004年に国立大学法人化が施行され、以後は予算とポストが徐々に削減され、病院経営が現実問題となった2006年の6月に教室開講50周年祈念式典（事務局長：平林洋樹助教、後に講師）を行った。式典には、小宮山淳学長、大橋俊夫医学部長、勝山努病院長に参席を賜り、初代教授の藤本憲司先生、2代目教授の寺山和雄先生、3代目教授の高岡邦夫先生が揃い、それぞれよりお言葉を頂いた。久しぶりの新入教室員6人が参加し、信大整形を取り巻く逆風の中に、教室の団結と熱意で舟を漕ぎ出す、記念すべき門出となった。私生活では、家内と上高地、善光寺や諏訪大社、温泉と蕎麦屋を巡り、信州の文化に触れることが楽しみとなった。一方、札幌市内の文教地区マンションに住んでいた私達には、夜が暗く冬は室内が寒い沢村のアパート住まいは少し辛いものであった。

2007年～2010年は、教室の診療班体制が、肩：畑幸彦講師（准教授）、肘～手指：内山茂晴講師（准教授）、脊椎：高橋淳講師、下肢：天正恵治助教（後に講師）、腫瘍：吉村康彦講師となり、国内に誇れる陣容となった。私の手肘外科手術は、小児、スポーツ肘、リウマチ、マイクロ再建などに集中した。高齢化社会による運動器変性疾患の増加、手術適応の拡大、救命救急センター稼働による外傷件数生の増加などにより、手術数は900/年に増加した。基礎研究は教室のオリジナリティを模索している段階であったが、臨床研究は独自の方向が増え始め、英語論文数は25編/年と少しずつ増加の兆しが見えた。2008年～2009年にかけて新外来棟建設、教室耐震改修工事があった。整形外科教室員一同が私を含めて、旭研究棟に移動し約1年間一つの部屋で過ごした。この共同生活は、部活の合宿ように整形外科教室員各自の壁が低くなり、団結心を高める思わぬ効果があった。事実、あずみのセミナー（後にGod hand seminar）、各関連病院出前セミナー、グリーンスティックセミナーを中心として、教室員・同門が一丸になってのリクルート活動が軌道に

乗り始め、新入教室員はこの4年間で20人を得て、教室は充実し関連病院縮小に歯止めがかかった。この頃、数年来の腰痛が嘘のように消えて、5年生との白馬合宿、医学部スキー部合宿に加えて、東京にいる娘2人と家族4人で正月ごとにスキーを各地で楽しんだ。教室員と国内整形外科医の交流を目的としたスキーセミナー合宿を開始し、現在も続いている。病院業務では、2009年より診療録管理室長を仰せつかり、紙カルテの保存、整理などを行った。2008年に退路を断つ意味で札幌のマンションを売り払い、松本市中心地のマンションに移動したことも、私と同門、教室員の間に一体感が育つことになった。新しいマンション住まいは、大学・松本城・松本駅に近く、快適な住環境とジム通いに恵まれるようになった。

2011～2014年、教室の診療班体制は継続し、更に診療能力が向上した。しかし、手術室の稼働率が100%近かったため、手術数は1,000件/年で足踏み状態であった。齋藤直人先生の率いるカーボンナノチューブの生体材料応用研究が花開き、IF10以上の基礎研究論文が毎年数本出るようになった。齋藤先生は、2014年に新設されたバイオメディカル研究所長に就任し、大学院生の基礎研究のレベル向上に拍車がかかった。臨床研究では、学内基礎医学教室、病院内の各部、などとの共同研究の成果が現れるようになり、教室英語論文数は25編/年に増えた。小布施町民を対象とした運動器コホート研究“おぶせスタディ”の準備を始めた。医科学生教育のために小冊子「臨床実習の手引き」を作成し、問診と身体所見の取り方の基本をスタッフ分担で指導する実習を開始した。新入教室員はこの4年間で計20人と安定し、関連病院整形外科常勤医数を増やすことが出来、教室員の国内外留学を積極的に推進することが出来るようになった。2012年1月中旬日本手外科研究会（事務局長：内山茂晴先生）を開催、演題数（全てビデオ演題36題、有料参加者数291名）と、過去の歴史を塗り替える成功を収め、信大整形手外科の飛躍を示す会となった。診療録管理室長としては、文書システムeXChart導入、全科手術記録管理、スキャンシステム立ち上げた。2011、12年度と附属病院卒後研修センター長を拝命したが、在任2年間の初期研修医採用数は29名、25名と歴代最低の人数で大役を果たせなかった。しかし、卒後臨床プログラム責任者の合宿参加等、整形以外の先生、医師との交流は新鮮で、視野を広げる機会をいただいた。

2015～2018年、10年以上にわたり教室の屋台骨を支

えてくれた畑 幸彦准教授（肩、リハビリ）、内山茂晴准教授（手肘）が、相次いで関連病院に異動した。手肘は林 正徳講師、腫瘍は鬼頭宗則診療助教に引き継がれ、若返りが進んだ。骨盤骨折や重度開放骨折、多発外傷例に対応するため、班の枠を超えた外傷再建チームを形成し、外傷治療のレベルを向上させた。脊椎脊髄疾患の患者は長野県各地、時に県外から紹介されるようになり、高橋 淳准教授を中心とした脊椎班の手術件数が増大した。2013～2017年まで手術部長として先進医療棟開設の準備に関わらせていただいたが、2018年に先進医療棟が完成した。先進医療棟の手術室にハイブリッドナビゲーション脊椎手術（ArzispheenoとBrain Lab Curveの連動は全国初）、スマート治療室の新設、拡充がなされ、手術件数は1,100件/年（予測）に伸びている。リハビリテーション部は、畑副部長時代に療法士数が一桁から30人を超える大所帯に成長していた。2018年から開始される専門医制度に対応したリハビリ専門医養成のため、リハビリテーション科長のポストを新設していただき、初代科長に前田道宣教授を招請した。リハビリテーション副部長には整形外科腫瘍班より吉村康夫准教授が昇任した。リハビリテーション部の充実により、療法士による科研費獲得、おぶせスタディなど多彩な英語論文が出せるようになった。2018年、リハビリテーション科長は堀内博志教授、副部長は池上章太講師に引継がれ、更なる発展が期待される。基礎研究、臨床研究は、これまで蒔いた種を刈り取る時期をむかえたこと、骨粗鬆、関節リウマチ担当の中村幸男講師の奮闘もあり、年間英語論文数は2015、16年で約35編、2017、18年は40編を超えるまでになった。医科学生4年生の臨床実習に「X線写真の診方」を取り入れ、月曜日早朝6時15分～7時15分までの症例検討会前に行った。冬の寒い朝の6時頃からの授業に医科学生の出席はほとんどないだろうと予測していたが、欠席遅刻はほとんど無く、最近の医科学生の勉強意欲の高さには感心した。この4年間の新人は24人で、そのうち女性が3人と女性医師がコンスタントに入るようになった。これに伴い、教室内女性医師部屋の創設、関連病院診療体制の充実、教室員の働き方改革などを進めている。強くなければ運動部では無いと指導してきた医学部ラグビー部が常勝チームに成長し、東医体5連覇を成し遂げた。私が顧問の最終5年間は無敗、という望外の喜びをもたらしてくれた。2015年9月日本末梢神経学会（事務局長：内山茂晴准教授）を開催し、過去最高の演題数

(197題)と参加者(有料入場者780人)を成功裏に終えた。2016年9月には中部日本整形外科災害外科学会(事務局長:高橋 淳講師,後に准教授)を開催,やはり過去最高の演題数(862題)と参加者(有料入場者1,100人)を得て,信大整形の活力を全国に示すことが出来た。2018年10月に教室開講60周年(事務局長:吉村康夫准教授)を迎え,田中榮司医学部長,本郷一博病院長をはじめ学内外,国内から多数の参席を賜った。整形外科教室の担う使命として診療,研究,そして教育の重要性を再認識し,団結を図る機会を持つことが出来た。診療録管理室の最後の仕事として,入院患者の疾病コーディングと略語集の作成を行った。国内学会活動として,日本手外科学会理事長,日本肘関節学会理事長,日本整形外科学会理事を拝命し,東京その他の出張が多くなった。私自身の手術執刀数は徐々に減少させ,後進の指導に努めた。

信大整形での足跡を振り返ると,信州の長野県内の整形外科医療の向上,信大整形外科教室・教室員の診療技術促進と業績の発展に貢献ができた点で満足している。不満足な点は,私自身のオリジナリティのある国際レベルの手肘外科の仕事を残せなかったことである。しかし,教室員1人1人の成長を身近に見ることが出来,自己採点は85点とした。人生の岐路において,何故か少数派を選択して来た。千葉の田舎から東京の中学・高校へ,北海道大学へと進んだ。当時はマイナーな整形外科を選び,整形内の専門は手肘外科に進

んだ。30年間に北海道各地で雄大な自然やスキーに楽しみ,たくさん手術をさせていただいた。思いがけなく助教授となり,さらに信州に異動して教授職として16年間,繊細な四季,自然と奥深い文化の中で診療,研究,教育する機会に恵まれた。これらの展開は常に充実した道に私を誘ってくれた。

退官後は,ここまで私を支えてくれた家族を今度は私が支えることを第一,手肘外科診療とその関連英文執筆200編(現在178編)完成を第二,そして信州の山々の散策とスキーを第三においた生活送るつもりである。そこで退職後は松本に自宅を残し,水~土曜日は郷里の千葉県の流山中央病院手・上肢外科センターに勤務することにした。同院は,北大整形時代の先輩,千葉大整形の友人達が務めており,院長の國吉 昇先生は信州大学昭和42年卒である。週後半や休日は,兄弟や東京在住の2人の娘,4人の孫(2,1,0,0歳)と供に過ごす時間が楽しみである。奇数週前半の月,火曜日は,信州大学医学部附属病院整形外科での診療,松本市立病院,上田医療センター,そして岡谷市民病院において手肘外科を続ける。また,偶数週の月,火曜日は家内と一緒に山歩き,スキー,街道めぐり,蕎麦などの信州探索を楽しみたい。欲張りな計画であるが,退職後は皆様とのご交流と北アルプスの四季を仰ぎ見る時間を,これまで以上にもてればと願っている。